

労働組合運動における選挙の意味は？

ダンピョンホ
段炳浩(平等社会労働教育院 代表)

2017年の秋は選挙の季節だ。既に金属労組が選挙に入り(9月20日現在)、続いて公共運輸労組と民主労総の選挙も予定されている。韓国の労働運動、特に民主労組運動を代弁する民主労総と、民主労総の加盟組織の中で組合員が15万人を超える最も大きな組織である金属労組と公共運輸労組の選挙は、労働界での愁眉の関心事にならざるを得ない。

今回の選挙は四次産業革命の本格的な進行が予告(既に進行中ではあるが)されており、文在寅政権の労働政策が、歴代のどのような政権よりも融和的に進められている状況で執り行われることになる。重要な時期に行われる選挙であるだけに、どのような政策が組合員の呼応を受けることになるのか、今から期待される。

この秋に行われる選挙が相当に重要で、またそれだけに期待も大きいので、今回の選挙を見るについての幾つかの願いを書いてみる。

労働者の選挙はブルジュアの選挙とは違わなければならない

何よりも、今回の選挙は最も透明で、きれいな選挙として行われなければならない。民主労総の中央の役員と地域本部長の選挙が同時に行われ、金属労組も中央の役員と支部長(地域支部と現代・起亜・韓国GMなどの企業支部を含む)選挙を同時に行うようになる。そのため、候補者たちだけでなく、幹部と活動家たちの成熟した選挙運動と、組合員たちの責任のある参加が要求される。選挙の後遺症によって、組織の一つの単位が数年間事実上の休眠状態に落ち込むケースもあった。今回はそのような見苦しいことが決してないように。

民主主義は人類が作った制度の中で最も合理的な制度の一つで、選挙はその民主主義を成長・発展させる花だといえる。それだけに、創意的で多様な政策が提起され、それが組合員たちの関心と参加を引き出し、認識と共有の幅を拡大することで、組織の内部的な統一と団結を強めるようにならなければならない。選挙を行う度に相互間の葛藤がより深まり、系譜と党派に分裂し、反目してきた過去の経験を、今回の選挙の流れの中で断ち切らなければならない。そして今回の選挙が組合員たちの課題認識と階級意識がより高まり、

労働組合への参加と、参加が拡大する契機になればと思う。

合理的で実現可能な、そして責任のある政策を出さなければならない。選挙ではどんなに当選が重要だとしても、労働者の選挙が当選だけを目的とする選挙になってはならない。万一、労働者の選挙がもっぱら当選だけを目的として行われるなら、それは我々があれ程軽蔑するブルジュア政治屋の選挙と別段の違いがない選挙に転落する可能性が高い。今までの民主労総の選挙の時には、任期内に組合員『100万を組織』する、『200万を組織』すると言うなど、とうてい守れない公約もやたらに出てきた。このような公約を見せ付けられる組合員たちが、自分が選ばなければならない指導者に対して、どれほどの信頼と関心を持つことができたかは疑問である。少なくとも組合員から認められ、信頼される指導者になるためには、空虚な公約でなく、責任を持って守れる公約が示されなければならない。

変化する労働環境に相応しい政策が提案されることを期待してみる。『科学革命』、『四次産業革命』が社会・政治・経済における中心の話題になって、既に数年が過ぎた。現在進行している四次産業革命を「一、二、三次産業革命は、誰かが1を作れば、それをN個に増やす水平的な拡張の概念だった。四次産業革命は未だ誰も経験したことのない、0から1を作る垂直的な革新を意味」するものだと定義することもある。あらゆるものが、殆ど別の段階に変わることを意味している。そして一、二、三次産業革命が原料を投入して製品を作るハードウェアの革命であったとすれば、四次産業革命は想像力とデータを投入して、巨大な革新を起こすソフトウェア革命である。このような変化が日替わりで進行している。現在の全世界のデータの90%が、僅かこの2~3年以内に生産されたものだという。今、我々は画然と違った未来の労働環境と向き合わなければならない。これからの労働運動をどのように発展させていくのかという問題意識くらいは、政策に盛られていなければならない。

任期3年を文在寅政府と共に過ごさなければならない次期指導部が、どのような対政府政策を出すのかも関心の対象だ。文在寅政府は金大中の『国民の政府』とは画然とした違いを見せているのは事実である。金大中・盧武鉉が改悪と改革の内容を当時(もちろん改悪の要素の方が多かったが)出して、労働者に圧力を掛けて強要したとすれば、文在寅政府は今のところは改悪の内容は出していない。もちろん文在寅大統領が金大中・盧武鉉大統領より更に改革的で、更に進歩的で、更に親労働者的であるためだということとはできない。新自由主義が推進される過程で累積されてきた問題を解決しないでは一步も進むことがで

きない状況と、これを排斥しては存在できない政権の創出の過程が、文在寅政権をして労働神話的な政策を出すようにさせた側面がもっと大きい。いずれにしても労働運動の次期執行部は文在寅政権をして、労働を裏切らず、改革政策を責任を持って推進するようにさせる対政府の対応戦略を持っていなければならない。

今回は、キチンとした革新が成し遂げられる発展戦略が出なければならない。労働運動の危機という言葉は、飽き飽きするほど永く使われた言葉になった。組織内の縄張り争いとあれやこれやの葛藤で力量を消耗させている。労働者が正規職と非正規職に分かれ、互いに揉めている。道徳的な弛緩によって幹部・活動家を見る視線がきつくなる頻度も多くなった。幹部と活動家の熱情と緊張が緩み、現実には安住しようとする姿に、官僚化を叱咤する声も大きくなっている。労働者たちは今どこに向かっているのやら、行けば道は拓けると言い、自らに対する確信すら失っている。このような問題を解決できないとすれば、外部の攻勢や抵抗がなくても、内部の限界によって労働組合運動は徐々に、より衰退の流れを辿ることになるだろう。体系とシステムを整備し、組織の文化を革新し、変化する労働環境に合った労働組合運動の理念と路線を確立することは、これ以上後回しにできない課題である。今回の選挙の過程でこのような中身が豊かに討論され、次期の指導部は、危機の運動を新しい飛躍の運動に発展させることができなければならない。

大衆の選択は賢明だ!?

労働組合運動は大衆を中心に置き、大衆の総意に土台を置く運動にならなければならないという原則を、微塵も疑ってはならない。しかし、『大衆はいつも正しく賢明な選択をする』という言葉が絶対的であると規定するのは、何故かためられる。おそらく、労働組合運動での選挙を通して明らかになった大衆の選択が、時には邪魔になったり、冷徹で理想的な判断よりは、親疎関係をより優先させた選択として現れているからであろう。どうしようもない面があるとは言っても、徹底して警戒し、止揚しなければならない。

労働者(労働組合)の選挙は、その人が生きてきた過程と、一つひとつの政策を中心に置いて選択する選挙にならなければならない。そのためには、何よりも包装されたイメージや粉飾した公約に幻惑されない、組合員の明るい眼が必要だ。選挙の季節を迎え、労働運動の未来を組合員の慧眼に期待する。